

well-becoming-with: わかりあえない他者が わかちあうこと



早稲田大学
文学学術院文化構想学部 教授
ドミニク・チェン

Photo by Takaya Sakano

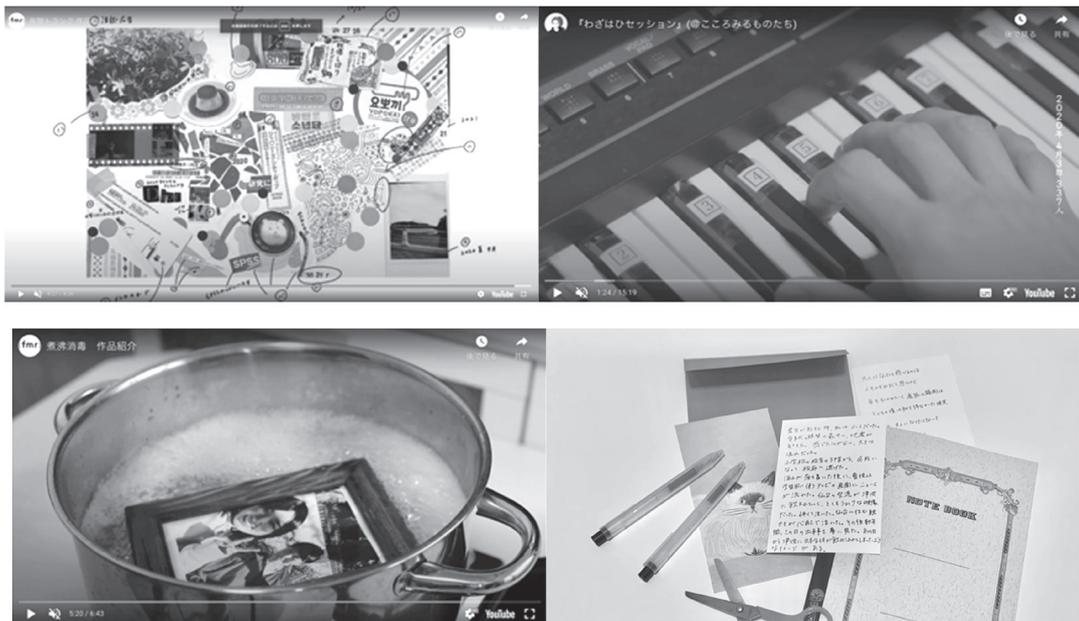
環境と他者と共に、よくなること

ウェルビーイングという概念は自己の心理的充足の要因を探る研究分野から生まれた。背景には、20世紀に追求された物質的な豊かさは必ずしも精神的な豊かさを生み出さないという心理統計データの蓄積がある。心理学、福祉と医療、社会学、人類学そして工学といった分野をまたぎながら、人々がいきいきと能力を開花させる条件が研究されてきた。筆者は、テクノロジーのもたらす価値を考察するために、主に2010年代以降のスマートフォンの普及によって生じた様々な社会問題について調査する中で、ウェルビーイング概念に注目してきた。

以来、ウェルビーイングの理論と実践に関する三

冊の共著¹を上梓しながら、多くの人々とウェルビーイングについて議論を交わす中で実感を強めてきたのは、「良い状態」(well-being)を考える上で「悪い状態」(ill-being)の次元を切り離すことはできないということだ。恒常的に充足している人間など存在せず、病気や障碍という目に見える問題を抱えていなくても、誰しもが常に何らかの欠乏や生きづらさと向き合っている。重要なのは良い状態の原因を探ることではなく、悪い状態をどう生きるかということではないか。

また、ウェルビーイングの捉え方には地域文化差があること、そして従来のウェルビーイング研究は個々人に注目するあまり関係性の次元が比較の見過ごされてきたことにも気がついた。このような学び



図：ゼミ生制作一例

左から、複数人が郵便によるリレーでコラージュを作成する作品、「災い」に関する作家のテキストを集めて作曲・実演したラップ楽曲、身近なものを煮沸消毒する過程を記録した映像作品、「喪失感」にまつわる投書を集めてラジオ形式で読み上げる作品。全て2021年に制作、「こころみるものたち」展（恵比寿amu）にて展示。

から、「わたし」個人だけではなく、「わたしたち」という一人称複数形の関係からウェルビーイングを捉えるための実践をさまざまに行いながら、重要なのはただ理論を学ぶだけではなく、かたちづくりという実践の動きであるという結論に至った。

ここでいう「かたちづくり」とは表現するという語で置きかえてもよい。表現行為は常に動的なプロセスを生み出すことから、being(ある)ではなくbecoming(なる)という語のほうが適している。becomingという語を「わたしたち」という主語で考える上では、近年においてフェミニズム哲学者のダナ・ハラウェイが、ドゥルーズ＝ガタリが構築した「生成変化」(仏語ではdevenir)の概念を下敷きに、人間と非人間の関係性の議論において使用しているbecoming-with(共に成る)という用語が想起される。わたしたち生物は、個体として点在しているのではなく、常に環境と他者との相互作用のネットワークのなかで別の状態に推移している、というリアリティを指している。

以上の考えを基に、本稿のタイトルに掲げたwell-becoming-withとは、「環境と他者と共に、よくなること」というふうに訳せる。筆者は、このテーマを実践する上で役立つ具体的な方法として、広義の芸術文化を含めた表現行為を捉えられるのではないかと考えている。この発想は、コロナ禍の期間のさなかであって、まさにパンデミックが引き起こした環境と対人関係の変化に深く影響されている。

本稿を執筆している現在(2024年3月)、街中には観光客の往来も戻り、コロナ禍では自粛の憂き目にあっていた展示やコンサートといった芸術文化的イベントもすっかり活気を取り戻しつつある。しかし、2020年から2022年後半まで、2年ほどの自宅待機や外出規制といった特殊な時間が流れる中、他者の身体的・物質的な表現が欠乏していたことは忘れられない。この文化的欠乏を経験する間、筆者は大学の場で若い人々と共に、表現を育てる実験を続けてきた。

大学のゼミとは毎年、半分が社会へ巣立ち、もう半分が新たに教室に入ってくるという特殊な共同体である。そこでは、これから社会的な仕事をはじめいくタイミングの人々が集まり、言葉やその他の表現手段を体得しながら、論文執筆や作品制作を通して、それぞれの抱える生きづらさや喜びの源泉を互いに観察しあっている。美大でも工学系でもない人文系の学部で、手を動かしつつ言葉を紡ぐという実践を続けている末にわかってきたのは、極私的な世界を書き出し、他者と共有することには根源的な相互ケアの働きがあるということだ。

鶴見俊輔が説いた限界芸術論や柳宗悦たちの展開した民藝運動の本質的な意味は、美的体験の契機は日常生活の隅々に溢れており、それらに気づく習慣を身につければ、たとえ社会的に名の知られる表現者にならなくとも、豊かな表現の世界に生きられるということだと言える。自らの表現をかたちづくり、他者の表現を眼差す行為は、災害や戦禍が渦巻く時代にあって、物質的および精神的な窮乏が広がる中、人間のいきる世界に微かにでも希望を抱くための方法論なのである。

このような問題意識を念頭に、筆者は大学教育の傍ら、たがいのウェルビーイングをつくることをテーマにした企業人向けハッカソンや、発酵のメタファーを切り口にしたデザインワークショップも行ってきた。本稿では、コロナ禍中の大学という場にフォーカスをあて、若い人々と表現の試行錯誤を行う過程でwell-becoming-withという価値がどのように具現化したかということについて考察したい。大学環境の特殊性は考慮しても、この個別の取り組みは企業やNPOなどの多様な労働の現場においても援用可能なヒントが見いだせるのではないかと思う。

当事者実験の場

筆者は2017年に早稲田大学に着任して以来、当学の文化構想学部と文学研究科(大学院)の表象・メディア論系コースで教員を務めてきた。この論系コースでは演劇、映画、現代美術やメディアアートからアニメ、ゲームに至る表現領域を扱う研究者が集まり、それぞれの専門も哲学、社会学、表象文化論、行動分析、美術史などにまたがっている。学生たちの関心も多岐にわたり、所属するゼミに固有の文化風土に親しみながら、ふだん接している現代文化を卒業論文のテーマに選ぶ人が多い。

筆者のゼミ(発酵メディア研究ゼミ)では、メディアアート(※さまざまなテクノロジーの媒介としての特質を浮き彫りにする表現領域)やインターネットカルチャー(※インターネットが普及して以降の文化活動の総体)における、デジタルテクノロジーを用いた表現の歴史を批評的に学びながら、情報技術やその他の現代の生活文化様式の影響について当事者の観点から考察する、というスタンスを採っている。「発酵」という語がゼミの名称に入っているのは、筆者が発酵微生物とのコミュニケーションを研究していること以外にも、コスパやタイパといった現代の情報技術が追求しがちな短時間志向から離れて、長期的な時間軸を意識するためでもある。

卒業論文では、それぞれの学生がひとりの人間として感じている違和感や問題意識を対象に実験を行ってもらっている。大文字の社会課題から入るのではなく、あくまで当事者意識の高いテーマを選んでもらっているのだ。当然ながら、最初からそのような課題を言語化できない人のほうが多いので、多様なディスカッションと発表を通じて、徐々に言語化して他者とわかちあう練習を行っていく。その上で、自らを当事者として設計した行為やモノを他の参加者にも経験してもらい、インタビューの定性分析を通して、わかったことを卒業論文にまとめてもらう。つくられるモノは、「強迫観念を押し付けないダイエットアプリ」や「散歩のプロセスに集中するためのオーディオデバイス」といった情報技術を用いたものから、「アニミズムを喚起される日用品」、「他者の人生を疑似体験するための人生ゲーム」といったマテリアルなものもある。体験としては、「匿名で悩みを相談しあう文通の仕組み」、「悩みを和菓子で表現し、食べ合うワークショップ」などの相互行為のデザインが多いが、「自己イメージを理解するためのセルフインタビュー」、「色彩のみで描く日記」といった一人で行う行為もある。

論文は大学制度の取り決めた卒業要件だが、それ以外に当ゼミが独自に行なっている行事として、学生が自由に制作した表現作品を学外の人々に見せる制作展示を年に一度開催している。当然、予算も時間も限られているので、いわゆる美術作品としての完成度は低いが、7年間この取り組みを継続しているうちに、美大の卒展とも工学部のデモ展示とも異なる、独自の風味のようなものが醸成されてきた。そのひとつが、来訪者が手を動かして参加できるワークショップ型展示が年々増えてきていることだ。たとえば最近では、フェミニズムの議論における時間的規範性をテーマにし、参加者が無意識に縛られている社会的規範を表出する作品や、就職活動時に企業から求められる適性検査やネットで拡散される性格診断といった人間の分類に抗うためのワークショップなどがあった。

当事者としての課題、ということにこだわっている背景としては、ソーシャルワーカーの向谷地生良が精神障害を抱える人々たちとのコミュニティにおいて見出した、当事者研究というフレームワークの影響が大きい。近代的な医療においては、存在しないこととされてしまう幻視や幻聴といった症状に患者自らが名前を与え、日々観察を記述し、他者に話すことで、自身のナラティブ言語を取り戻す。東京大学の熊谷晋一郎と綾屋紗月によって身体障害や発達障害

といったフィールドにおいても研究が行われている。自身も脳性麻痺と生きる熊谷は、障害者運動において「障害とは個人ではなく社会が作り出しているものである」というテーゼを発展させ、「自由とは依存先を増やすことである」と語っており、個人に能力を帰責する能力主義(ablism)を批判している。

筆者は幼少の頃から軽度の吃音と共に過ごしてきたが、吃音研究を行う伊藤亜紗にインタビューを受け、当事者研究について知った時に、それは個人的に克服すべきことであるという能力主義的な考えを持っていたことに気づかされた。吃音にも多様な当事者が存在しており、それぞれに独自の向き合い方があることを知り、そのようなままならなさが自分を自分たらしめているものとして受け容れることができるようになった。熊谷は当事者研究の最も大事なポイントは、他者の語りを聴く側が変化することであると主張するが、筆者も自分とは違う病状の人の語りを聴くことで、自分の問題を相対化したり、肯定的に捉えるための気づきを得ることができた。そのうち、当事者研究の考え方は、社会的に定義される障害の有無に関わらず、有益な方法論として用いることができるのではないかと考えるようになった。

学部全体の傾向として作家やアーティストなど他者の作品分析が主流の中、わたしのゼミでは学生自身が非言語的な表現を試みつつ、その自己記述も行うという点が特徴となっているのは当事者研究の影響によっている。ただ、医療福祉を専門としているわけではないので、誤用を防ぐために当ゼミでは「当事者実験」という表現を使っている。それでも、時間をかけながら互いの表現を注視するというエッセンスを受け継ごうとしている。

筆者が属しているのは美術大学でも理工系でもない学部なので、作品をつくるための空間もなく、潤沢な予算があるわけでもなく、制作を前提にしたゼミ運営の体制を整えるためには多くの試行錯誤を要しているし、今も理想的な状態であるとは言い難い。それでも、執筆や制作といった表現、その相互鑑賞やディスカッションという協働行為には、ただ学位を得るための作業ではない、本質的な価値がある。そのことを最も実感したのはコロナ禍の社会的影響が著しかった、特に2020年はじめから2022年初頭までの期間だった。

危機が生み出す注視

この期間、大学のすべての授業がオンライン化した。対面で集まったのは年に一度か二度のみ、という、学びのコミュニティにとっては極限状態を乗り切ろう

とする中で、手を動かして表現をかたちづくるという当ゼミの方針は、デジタルテクノロジーの活用によってなんとか支えられた。これまで所与のものとしていたコミュニケーションの前提が崩れた中で、あらためて話しあうことの意味を問い直すところから始め、ある意味においてすべての授業が実験的な試行錯誤の場となった。対面での協働行為の機会を喪失したこと自体が展示制作のテーマとなり、当事者としての苦痛やストレスを開示しあうことを通して、それぞれが希求する望ましい関係構築や学びについて、リモートの声と文字で語り合った。

特にコロナ禍の混乱が直撃した2020年度を思い返すと、レベッカ・ソルニットが『災害ユートピア』で示したような利他的なコミュニティが、筆者のゼミ以外でも様々な教室で出現していたように思う。解消されない孤独感や不安に苛まれる体験が、程度の差こそあれ、共通のナラティブとして機能していたのだろう。ひとつの大きな文脈を共有した上で、メンバーのそれぞれが持つ固有の背景から、異なる語り声を聞き合う場では、自ずとメンタルヘルスやウェルビーイングに関する話題も話されていった。この音声と映像とテキストデータだけでつながった不思議な共同体では、目指すべき単一の目標や解消すべき問題などは存在せず、ただそれぞれの生についての語りにも注意を向けあい、互いに影響を受けあう態度が醸成されていた。

このように書きながら、この振り返りそのものがそれこそ「災害ユートピア」的な、ある種の過去の美化を被っていることも自覚している。オンラインでのコミュニケーションは常に不完全燃焼感を残し、時にはメンバー間で深刻な衝突を生みもした。しかし、こうしたままならなさが全員の生活の基底をなしていたことから、おのずと各自が「望ましき」について

おぼろげながらも切実に思考を巡らしていたと記憶する。未曾有の災害という大きな文脈に包まれて、危機感と緊張感が共有されたことによって、個々には異質な「わたし」たちが自ずと互いの差異に注視し、なんとか「わたしたち」という主語の輪郭を探り当てようとしていたと思う。図らずとも、危機的な状況の共有から必然的に互いをケアしようとする志向性が生まれていたのだ。

微かな表現の萌芽を注視し、育む

本稿では、筆者の運営する大学ゼミの継続的な実践を通してあたためてきた思考とその過程で発見した価値について、一人称での記述を行った。芸術の創作や鑑賞のもたらす精神看護的なセラピー効果や、持続的ウェルビーイングとの相関に関する心理研究は多くなされているが、その知見の多くが産業に転用されると「セルフケア」という語が示すように、個人に閉じた自己啓発の情報として受容されがちなように思う。本稿で示したwell-becoming-withという姿勢は、個人の領域を尊重しつつも、根源的に異質でわかりあえない他者同士が刹那的にでも連帯し、共に善く変化していく動きを意味している。大文字のアートや美術を志向せずとも、日常生活のかすかな違和感や気付きを掬い、言語やその他の表現手法でかたちをあたえ、互いに注意を払い耳を傾けあうことは、職業的専門を問わず万人に開かれている方法論として考えている。

- 1 『ウェルビーイングの設計論』(2017)、『わたしたちのウェルビーイングをつくりあうために』(2020)、『ウェルビーイングのつくりかた』(2023) すべて渡邊淳司との監訳・編著・共著、ピー・エヌ・エヌ新社刊行。



※発酵メディア研究ゼミのウェブサイトへのリンク。本稿で紹介したゼミ活動内容についての情報や、過去のゼミ論文のタイトル一覧(2022年度以降は希望者のみゼミ論PDFを公開)を掲載している。